別記様式第６号（第16条第３項，第25条第３項関係）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博士（保健学）	氏名	山内　加奈子
学 位 授 与 の 条 件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

主観的健康感が生命予後に与える影響ならびに主観的健康感の変化に関連する心理・社会的要因　―地域高齢者における追跡調査―

論文審査担当者

主　　査　　教授　　花岡　秀明　　印

審査委員　　教授　　宮下　美香

審査委員　　教授　　岡村　　仁

〔論文審査の結果の要旨〕

主観的健康感と生命予後の関連について明らかにした研究は，1970年代から欧米を中心に行われてきた。しかし，本邦において，主観的健康感と生命予後に関する先行研究は少ない。また，これまでに主観的健康感に関連する要因として身体的活動状況が関連することが明らかにされているが，これに加えて心理・社会的要因の影響も示唆されている。しかし，これまでに本邦では，主観的健康感に関連する心理・社会的要因に着目した報告はなされていない。よって，本研究においては，研究１として，地域高齢者を対象に主観的健康感と生命予後との関連を検討し，研究２として，主観的健康感に影響を及ぼす心理・社会的要因を明らかにするために，質問紙調査を用いた縦断研究を実施した。

愛媛県東温市の65歳以上の住民全員7,413人を対象に「高齢者総合健康調査」アンケートを実施し，その調査をもとに死亡小票と住民基本台帳を用いて，５年半後まで追跡可能であった5,037人について生存あるいは死亡を確認した（研究１）。また，初回調査から５年後に同様のアンケートを実施し，4,372人から回答を得て，突合が可能であった3,357人を分析対象者とした（追跡率76.8%）（研究2）。

研究１「主観的健康感と生命予後との関連」においては，最初に高齢者自身の主観的健康感が全死因による死亡と関連するか否かを検討した。さらに，主観的健康感と死因別の死亡との関連について，主な死因である循環器疾患，悪性新生物，肺炎による死亡について検討した。その結果，主観的健康感に対して４段階の選択肢（非常に健康である，まあ健康である，あまり健康でない，健康ではない）で回答を求めたところ，「非常に健康である」の健康リスクを基準値１として，年齢，生活習慣，既往，心理・社会要因を調整した場合，「健康ではない」の死亡相対危険度（Relative Risk [RR]）は，男性においてはRR = 2.50（95%信頼区間[95%CI]=1.31-4.79，p=0.006），女性においてはRR = 3.02（95%CI=1.15-7.91，p=0.025）と有意に高かった。また，主観的健康感と死因別死亡の関連について，性および年齢を調整して検討した結果，主観的健康感の「健康群」の健康リスクを１とした場合，「非健康群」の循環器疾患においてRR = 2.75（95%CI=1.46-5.17，p=0.002），また悪性新生物においてRR = 3.42（95%CI=2.04-5.72，p<0.001）と有意に高かった。

研究2「主観的健康感と心理・社会的要因との関連」においては，地域高齢者の主観的健康感の5年間の変化，および初回調査時に主観的健康感の高かった者が5年後に主観的健康感が低下したことに関連する心理・社会的要因について，性・年齢群別に検討した。その結果，5年間の追跡後に主観的健康感は有意に低下した。また，主観的健康感を低下させる心理・社会的要因としては，性・年齢群別でみると生活満足度のOdds Ratio （OR）が，前期高齢者の男性で0.85（95%CI=0.77-0.93，$p<0.001$），女性で0.79（95%CI=0.72-0.87，$p<0.001$），後期高齢者の男性で0.87（95%CI=0.77-1.00，$p=0.042$），女性で0.89（95%CI=0.80-0.99，$p=0.029$）と全ての群において低く，それに加えてうつ傾向有のORが前期高齢者の女性で1.68（95%CI=1.11-2.56，$p=0.015$）と高く，老研式活動能力指標のORが後期高齢者の男性で0.80（95%CI=0.70-0.91，$p=0.001$），後期高齢者女性で0.88（95%CI=0.80-0.97，$p=0.013$）と低かった。

これらの結果から，本研究では，地域高齢者における主観的健康感は，年齢，既往，生活習慣，心理・社会的要因を調整した後も全死因および循環器疾患，悪性新生物による死亡と有意に関連することが認められた。また，主観的健康感の低下には生活満足度の低さが，性別および年齢群別の全ての群において関連しており，さらに前期高齢者の女性ではうつ傾向有，後期高齢者では男女ともに老研式活動能力の低さが関連していることが明らかとなった。

以上，本論文は地域高齢者を対象とした追跡調査から主観的健康感と生命予後との関連を明らかにした。さらに，主観的健康感の変化に関連する心理・社会的要因を検証したことによって， 主観的健康感の評価において，対象の年齢等に応じた心理・社会的要因を考慮した包括的アプローチの重要性を提示したことは，今後の健康科学の発展に資するところが大きいと高く評価される。よって審査委員会委員全員は，本論文が著者に博士（保健学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。